

### Ⅲ. プロジェクト研究会で A. ビデオ記録のあり方を探る

## Video-Cued Comparative Ethnography ビデオを手がかりにした比較文化エスノグラフィー

東京大学大学院教育学研究科  
教育研究創発機構  
トービン先生公開講演会

2005年5月20日（金）18:00~21:00

東京大学本郷キャンパス 赤門総合研究棟 200番教室

講演者： ジョセフ・トービン（アリゾナ州立  
大学教育学部教授）

指定討論者： 波多野諠余夫（放送大学）  
恒吉僚子（東京大学）

通訳： 門田理世（西南学院大学）

司会： 秋田喜代美（東京大学）

（以下では、トービン、波多野先生の英語については門田先生と共同研究者の東京女子大学唐澤真弓先生が通訳されたのでその通訳によった日本語を以下記してある。また訳語が日本語訳よりもかなり詳しく違いがある場合は英語と日本語を両方、併記したところもある。）

秋田：これより教育研究創発機構、第1回公開研究会を開催させていただきます。現在、教育研究創発機構、なかでも学校臨床総合教育研究センターにおいて、ビデオを使った学校の授業そして学力に関する比較文化研究をいたしております。その関係もありまして、本日はアリゾナ州立大学教育学部のジョセフ・トービン教授にお話をいただきます。先生はビデオを使った比較文化研究もしくは比較文化エスノグラフィーといえれば必ずテキストにも出てくる著名な“*Preschool in Three Cultures*”というビデオとテキストをお書きになりました。最初にアナウンスした題名と多少は違いますが、本日はトービン先生の89年の研究、そして20年後に行われた研究“*Continuity and Changes in Preschool in Three Cultures*”についてお話をいただく予定になっております。詳しい説明はいたしません。トービン先生はシカゴ大学でPh.D.をお取りになりまして、最近の著書には“*Pikachu's Global Adventure*”といった日本のカルチャーやドイツ移民の比較文化研究等、幅広いご研究をされておられます。また、今日お越しくださいました東京女子大学の唐澤真弓先生と、Yeh Hsuehさんとの三人で現在比較文化研究をなさっております。また、本日は指定討論ということ、放送大学の波多野諠余夫先生、

東京大学学校臨床センターの先生で比較文化研究がご専門の恒吉僚子先生に指定討論をお願いし、西南学院大学の門田理世先生に通訳をお願いしております。それではよろしくお願いします。

トービン：ありがとうございます。トービンです。これよりプレゼンテーションをさせていただきますが、日本の学会やステートメントはジョークから始まらず謝罪から始まるということで、今日は日本語でプレゼンテーションができないことをお詫び申し上げます。また、これからいたしますプレゼンテーションの中で私自身が犯すであろう間違いについても先に謝らせていただきたいと思います。私自身、文化人類学者という立場をとっておりまして、この観点から言いますとアウトサイダー、つまりフィールドの中の人というよりも、フィールドの外の人間として現象を見るということをしております。そのなかで、正しく今日のプレゼンテーションというものを皆さんにお聞きとどけられるのかは分からないのですが、間違っただとしてもそれが面白い、非常に興味ある視点での間違いであるということを願っております。

私と一緒に研究をしております、隣に座っている唐澤真弓先生にまずお詫びを申し上げます。今日、私がもし日本の文化について間違いを言った場合、私は月曜日にはもうアメリカに戻りますので構わないのですが、彼女は日本で教えていらっしゃると思いますので、彼女が責任を取るような形になると思います。ですから今日話すなかで、日本の文化について正しいことをもし申しあげましたら、それは唐澤先生が正しいということで、日本の文化で間違っただけを申しあげましたら、それは私の責任ということでご了解をいただきたいと思います。

皆さんにお聞きいただくこのプロジェクトは、まだ途中の状態にあります。皆さんにお聞き頂いたなかで勉強していきたいと思っております。その辺もご了解ください。皆様からのフィードバックは非常に私の研究のサポートになりますので、屈託無いご意見をいただきたいと思います。特に波多野先生、恒吉先生、今日はどうかよ

ろしくお願いいたします。実は最初にペーパーを送って下さったのですが、私達が読んだものと今日は発表内容が変わっております。その点を波多野先生と恒吉先生にお詫び申し上げます。

25年前日本の京都について研究を始めました。僕の上の子は泉山幼稚園という京都の幼稚園に入りました。彼の日本の幼稚園での経験はものすごく面白かった。泉山幼稚園の園長先生は熊谷先生。お詫びの後、お礼ということで、日本の幼児教育のことについて知るきっかけを作って下さった熊谷先生にお礼を申し上げたいと思います。父親として幼児教育に入ることになったのですけれども、その後、研究者として更に勉強を続けております。もうひとつ、吉沢先生と申しあげる、“*Preschool in Three Cultures*”にも出てくる小松谷保育園の園長先生にもお礼を申し上げたいと思います。そしてもうひとつ、まどか幼稚園の松山先生にもここでお礼を申し上げたいと思います。

1985年に京都で一年間を過ごした後に米国に戻ったのですけれども、そこでデビット・ウー先生と出会い、中国と日本それにアメリカを加えた三つの文化の幼児教育について研究することにしました。

私は教育学部にずっと所属をしていたのではなく、当時文化人類学部で教鞭をとっておりました。したがって日本の幼児教育を通して日本の文化を学びたい、という視点で先ずこのプロジェクトに取り組むことになりました。日本の幼稚園の文化を見るという視点と、プリスクールを通して日本の文化をもう一度見るという視点、この二つを兼ね備えているということになります。日本の幼児教育を文化人類学的に研究したということが、私を教育学部、特に幼児教育に引きこんでくれることになりました。ですから、以来15年間、教育学部の教授です。

最初の研究では、ひとつの文化にひとつの幼稚園、という形の研究としてスタートいたしました。20分に編集したビデオを、その後もう一度幼稚園に持って行きまして、先生に観ていただきました。そこでの先生たちのリアクションを伺いました。ビデオをどちらかといいますとキュー、手がかりとして先生方が思っていることを知るために使ったということです。今回ビデオというのはデータではなく、どちらかという手がかり、先生方が何を考えていらっしゃるのかを聞き出す手がかりとして用いられました。先生に見せ、その後園長先生もしくは主任の先生に見せ、そのあと他のクラスの先生にも見ていただき、その後違った幼稚園もしくは保育所の先生に見ていただき、最後には他の二つの違う規範や文化を持っている国、この場合は中国とアメリカになり

ますけれども、そこの人達にも見てもらいます。だれもこの方法に名前をつけていないのですが、私たちはこれを「ビデオを手がかりとした多声的な比較文化エスノグラフィ」と呼んでおります。すごく長ったらしくややこしい名前なので私たちはいつも「pre-school in three culturesメソッド」と呼んでおります。

再三申しあげていますがビデオはデータではなく、インタビューを実際に行うというよりは、もっと具体的に見たものに対してどういうリアクションをとられるのかというところから、考えていらっしゃることを引き出す、そういったツール、道具としてビデオを用いています。それでもやはりビデオはデータと思われるのです。例えば日本のビデオをアメリカの先生に見せると「あ、これが日本の幼児教育なの。よく分かったわ」というリアクションが返ってきます。日本の先生に日本のものを見せると「なぜこんな幼稚園を撮ったの。間違ったところを撮っているわよ」というリアクションが必ず返ってきます。

それは中国のものを中国の人に、アメリカのものをアメリカの人に見せた時も同じ反応です。それが証明されるかどうか、今夜皆さんとともにみてみたいと思います。唐澤：エキゾチック、ファミリーということがきちんと訳されていないと思うのですが、自分たちにとって当たり前のもので、当たり前でないものとの違いを見ていく、ということになると思います。

今夜は先ず皆さんに中国のビデオを観ていただいて、その後で日本のものを観ていただこうと思います。そうしますと、また違った観点でビデオとその内容を見ていただけるのではないかと思います。三つの文化を比較することには変わりはないのですが、今回の新しい研究には20年間という歴史的時空の系列が入ってきています。今までにほとんどそういった研究はみられていません。時系列の流れとクロスカルチャー、これらをミックスした研究というのを他に私は知りません。

今夜いたしますことは殆ど恐らく実現不可能に近いことかもしれません。時空列の長さ、つまり歴史的な側面と、クロスカルチャーの側面の両方を合わせて皆様とお話したいと思います。1989年の時と全く同じ幼稚園三件に戻っております。更に今回の新しい研究ではひとつの文化でもうひとつ新しい研究フィールドの調査にあたっています。

今日六つビデオがあることになるのですけれども、もうひとつ面白いことをいたしましたのは、15年前に撮ったビデオを、今先生をなさっている先生方に、

もう一度見ていただきました。プリスクールゴールは何か。プリスクールにさせているものは何か、というところを各文化のなかで見てみよう、というのが先ず一目的のリサーチの趣旨です。

どうしてプリスクールがあるのですかといいた質問を、外から来た者として私はすることができます。二つ目はその歴史的な経過です、15年間の違い。三つ目には各文化の社会的、文化的な変化、そういった社会的な背景というものを受けてプリスクールがどのように変わったのか、そうしたところも見たいと思っています。

本日は先ず中国と日本のビデオを観ていただきまして、その後で皆さんと何がみつかったのかというようなところも、お話し合いができたかと思っています。

今日は講義形式ではなく皆様のリアクションなどをそのまま受けながら、ワークショップ的に、ざっくばらんな雰囲気で行きたいとトービン先生はおっしゃっています。ここで今までお話しした方法論などについてご質問、ご意見をお願いします。

秋田： Who is recording the video tape in each three cultures?

トービン： Who made it? Our team is composed of three professors and some graduate students. For all six tapes, all three of us made them. It's important, I think, that when you make the tapes, when you visit the schools, that you have an international team. First of all, the teachers, the children, the directors and the parents appreciate that it is an international study. It establishes an ethnographic mood, which is very different from domestic research.

唐澤： それに加えて多分秋田先生のご質問は、アメリカのテープはアメリカの先生が撮って編集したのか、ということだと思うのですが、ビデオの撮影は全て三人でやり、その編集をするのも基本的に全部三人で行いました。したがって、ひとつの文化の人だけの意見が優位になる等、どこをこう削るかということに関しては様々なディスカッションがあったと思います。しかし、最終的にはThree Culturesのビデオをつくるために適切なもの、という点に三人で納得して落ち着いたことになっております。

トービン： We are not professionals, we take two cameras and we get tired and so we alternate. We try our best. We consider that it is better for our projects to have academics who are not professional moviemakers, but who have a good feel for what we want to study instead of professional moviemakers.

門田： 私たちはビデオ撮影の際に、二つのカメラを持って入りました。ジョー・トービン先生自身が思っておられるのは、ムービー・メーカー、つまり撮影の専門家がカメラを持って現場に入るのではなく、現場がなんのかを分かっている人がカメラを持って入るということ。そこにひとつの特徴というか、大切な点があるのではないかと考えております。

五日間のプロセスでビデオ作ったと考えて頂いていいかと思います。一日目はビデオを持って全く何もせず、知り合いになるという感じ。二日目は子ども達が納得のいくまでビデオカメラで遊んでももらいます。三日目は、練習的な撮影。四日目が本番の撮影となります。五日目は撮ったものを子ども達や先生方に見せました。

トービン： Any other questions about methods?

質問者（男性1）： I do not understand why you needed the new videos, to study the historical change you can use the old videos.

トービン： Yes, I think you are right. When we wrote the proposal for the new study, we were afraid some of the schools might not cooperate to be studied again. We didn't know if they would agree. Originally, I had decided not to do this research again, I thought I was done with it you know it was my research of youth. And then, Yeh Hsueh, my Chinese partner, approached me five years ago and he said, "You have to stop showing the Chinese video because it's too old. China has changed so much that your old study is out of date and you have to call it historical study." So, he convinced me to do the new study. Because China is changing in an unlevelled way, we were afraid that when we went back to Kunming we might not see the change. So we wanted to prove our chances to have a stimulus tape that showed the change by going to Shanghai. But in retrospect I do not think it was necessary, and it would have been cleaner if we just had the original three. So you are right, we should have had the confidence to go back to the original three because now it's too many countries and too many tapes. Three is already a lot, six is like a play with too many characters. So it's a problem.

質問者（女性1）： You have two tapes, one is the old one and the other is the change and they are both twenty minutes. So, are showing twenty minutes and twenty minutes, total of forty minutes in each country?

トービン： In three countries.

聴講席：（どよめき）

問者（女性1）： Obvious, I see.

トービン： You can see all the problems. What we did is, within each country, we showed each schools their own tape. And then, within the country we showed them both tapes. And we had them talk about the difference. But for the international comparison we just used one tape from each country because it was just too much. So it's not so clean in that respect.

唐澤：ビデオを見せる時に、同じ国の中では自分たちのもの、古いもの、そして違うところのものなどを見せました。けれども文化比較をした時には六つ全部を見せるのではなく、例えばひとつの幼稚園を訊ねたとき、それぞれの文化につきひとつのビデオをお見せしました。全部を見せると私たちでも疲れるくらい長くなってしまいますので、そういう形はとりません。

トービン： I've been talking too much so let's watch some video, some of the issues should come up again. Let's watch the Chinese video. DaGuan is in Kunming in Yunan, Southwest China.

唐澤：雲南省のクンミングという都市です。コンメイ、昆布のコンに明らかと書きます。Pre-school in Three Culturesの中ではドンペンという名前になっていたかと思いますが、実はダグアンという名前です。当時はオリジナルな名前を出してはいけないということだったので、学校の名前を変えていました。今度はぜひ本当の名を出してくれということでした。本当の名前はダグアン、漢字で書くと大きな現実の現と書きます。ダグアンという雲南の町の中にある幼稚園です。

<ビデオ上映>

最初にこのビデオを撮った時、中国では四分の一の子ども達が寮制度の幼稚園に寄宿し、先生たちが子どもの面倒を見て、水曜日と土曜日に家に帰るということをしていました。二十年後に同じダグアンに帰った時、そこではもう寮制度はとっていませんでした。しかし、中国全体のなかではいまだに寮制度というものはあります。その理由は変化しています。以前は制度的なもので、両親たちが働くために子ども達を寮に送るというようなことだったのですが、最近はヤッピー、特に若いお金持ちのお母さんたちの仕事が忙しいので子どもを預けるということで、むしろ寮制度がカムバックしている傾向があるそうです。ただ、ダグアンにおいては既に寮制度はとっていません。

寮制度だったので、この子は親と離れるのが嫌で、お

父さんにいろいろ言っている場面です。ビデオを刺激として使ったということを今のナレーションからお分かりいただけるのではないかと思います。この行動をみて他の文化、日本やアメリカの先生たちはこれは甘やかashiで良くないことだというようなことをおっしゃいました。けれども中国の先生は、寮制度をとっているなかで、この年代で親から離れて暮らすことは大変なことだから、子ども達がこのように離れるために時間を使うことは甘やかshiとは考えてはいない、とおっしゃっています。同じ刺激を見て違う解釈があるということの例としてあげることができると思います。

この当時に既に一人っ子政策がとられていて、すべての子どもが一人っ子だったわけで、その時に甘やかshiということが既に問題視されていたわけですがけれども、そのことをきちんと理解した上で先生たちが解釈し、説明しているということです。

二十年後に訪れた新しいダグアンです。

この子はこの日すごく大変な状況で、あちこちで泣いていました。

この子どもは友達ともうまくいっていなかったもので、そういう社会的な関係ができないのは甘やかされてきたからか、というようなことを聞きました。するとむしろ逆で無視されているということでした。一人っ子なのですけれど親御さんがあまり面倒をみていなくて、送り迎えもお父さんお母さんが来ることは殆どなく、代わりに大きな工場をやっているらっしゃるので、そこの召使の人達が送迎をしているということでした。お金持ちなのですが、洋服を殆ど変えてくることもなくて、「子どもの洋服を変えてあげてください」と先生たちが注意をしながらあげているという状況でした。

これはまた二十年前です。学習の場面です。積み木でひとつの形をつくるような、IQのテストであるようなものです。この頭の形は当時のファッションみたいです。同じブロックを使う遊びでも二十年経つとこのようにカラフルで、物も大変豊富な状況です。自由遊びと創造的で子ども中心の遊びの時間が多くなったそうです。古いところだけではなく、次は上海の新しいところのクリップをお見せします。

上海はある意味では中国らしくないところであると思うのですが、それは街の体系だけでなく、幼児教育に関してもいえるところで、一番進んでいるとも言われています。

中国の幼児教育の新しいカリキュラムは上海カリキュラムといわれる程、上海の華東師範大学の朱先生という方が一番の重鎮として活躍なさっていらっしゃいます。

上海のビデオを他の中国、たとえばダグアンなどで見せたときに、これは中国の典型的な幼稚園なのか、それとも一番進んでいる幼稚園として中国の将来の方向を示すものとして捉えることができるものなのか、ということが私たちの質問でありました。

これは私たちが驚いたところですが、毎日グループの中の一人の子どもがストーリーテラーになり、短い子だと三分、長い子だと十分以上、この子の様に、テキストを見るのではなく全部覚えてきた物語を一人でお話するというをしています。日本語のサブタイトルがありませんが、木があり、周りを見て、とひとつの物語になっています。絵本を丸ごと全部覚えてくるようなときもあるし、自分でお話を作ることもあります。周りのお友達はこれを静かに、ちゃんと終わるまで聞いています。このお話を聞いた先生たちは、彼の話について評価を含めていろいろと聞いています。例えばパパイヤについて話をしたときに、完熟という言葉を使うことができる、など先生は単語の使い方にも注意しています。そしてこの後、皆で手を挙げてこの子がストーリー・キングに値するかどうかを皆の投票で決めます。賛成と言って手を挙げています。数を数えると18人ということで、彼に王様の称号をあげることになりました。しかし同時にノーと言った子どももいるので、どうして彼はふさわしくないと言ったのか、その子どもたちの意見を聞いてみようということになりました。すると言葉をはっきりしていなかったのもうちょっとちゃんと言って欲しかったということでした。ですから、この次はもっと大きな声を出して話しをしましょうということになりました。

以上ご覧になって、毎日交代で子どもたちが十分間何も見ないでお話しをするということに関して、どのように思われましたか？私たちが中国の先生になりすましますので、聞いていただけたらと思います。

質問者（男性2）：ああいう活動に変わったのは急に変わったのですか、それとも徐々に変わったのですか。

唐澤：大連からの中国人の留学生夫婦に私は聞いたのですけれども、自分たちが小さい頃からこれをずっとやってきたと言っていました。上海が飛びぬけて先に進んでいる、上海だから見られるという傾向ではないみたいです。ですからご質問の答えになっていないかもしれませんが、変わってきたか、というのではなくて子ども達のなかではずっと受け入れられていることです。また、ここでは撮していないのですけれども、次の日は誰がするのかを当番の子と相談するのですが、日本の子どもだったら「嫌だー、絶対僕はやらない」などの反応がありそ

うな気がするのですが、そういうことはなくスムーズに、「じゃあ私がやります」と手を挙げて積極的に言います。ですから嫌なことにはなっていないというふうに受け取れます。

質問者（男性2）：15年前に同じようなビデオはありましたか？

十五年前は本当に教科書通り、というか本をきちんと覚えていたので、その意味では今の方がクリエイティビティは高くなっているのだと思いますが、話しをするという伝統自体はあったようです。子ども同士が批判することについてはどのようにお考えになりましたか。

質問者（女性2）：今大連でも留学生がやっていらっしゃったということですが、そうすると先生の経験によって何年かやっていくなかで、大連でもやっているということを、こういうふうに入れてくるということもあると思うのですね。私たちの長い経験の中で誰かのそういうのをそっちに入れてくるということがあると思うのですね。そういうことはなかったのでしょうか？先生はけっこうお歳でしたよね。

唐澤：大連における経験までは伺いませんでした。私たちはすごくびっくりしたのですが、シューエーというもう一人の中国人の先生にとってはそんな特異なことではなかったのも、どこが始まりかということは今時点では迎えられるほど新しいものではないようです。

質問者（女性3）：現在の中国、日本、アメリカの三国における幼児教育のプラクティスを研究するにあたり、フィールドを選ぶ基準というものはあったのでしょうか。

唐澤：見え方の基準、つまりこういうところだからここを選ぼうというよりも、むしろ先生と教師との関係が良く、協力的な幼稚園を選んだということがあります。これはオリジナルな時も多分同じようなことだったと思います、あの当時、中国でビデオを撮らせてくれるということ自体が大変貴重だったと思います。選択肢がなかったいうふうにも言えるかもしれませんが、そういう状況でした。

唐澤：最初に説明しませんでしたでしたが、単に非常に先を行っているから、大変特別な教育をしているからという理由で幼稚園を選んだわけではありません。東京なら東京からターゲットはとってきていますけれども、アッパー・ミドル・クラスの子ども達しかないような所ではなくて、むしろ普通の子どもの達がいる所を選んでいきます。彼は文化人類学の専門なので、どのくらいサンプリングとして代表性があるかというよりも、むしろあるひとつ

の日本の幼稚園を題材に取り上げる、ということを目指しました。その意味では明確な基準を持つということにはなっていないと思います。ただ、私たちだけが勝手に選んだとか、先生との関係が良かったからということだけではないことを確かめるために、同じ文化の先生たちにビデオを観せた後「これは日本の幼稚園を代表しますか」という質問ではなく、「これは日本の幼稚園としてよくある風景ですか」という質問をして、これはとても変わった幼稚園だというような反応は無かった幼稚園であった、ということはお知らせできるかもしれません。

どこの幼稚園でも、やっているかやっていないかは別として、これは知っているやり方で、それを自分たちで取り入れたらいいなと考えています。子ども同士の批判をするということに関してもやられている幼稚園もあるし、やられていない幼稚園もあるということです。

批判をすることに関してアメリカの先生たちに伺ってみると、あるアメリカ人の先生はこんな小さいときに批判されて自尊心が下がると言いました。アメリカの教育で自尊心は大事だといわれているわけですから、とんでもないということになります。中国の先生たちに、アメリカで聞いたことを改めて聞いてみると、自分がきちんと何かを成し遂げたということがあるので、子ども達の自尊心を下げるというものでもないし、批判を受け入れるということが大事なことだと考える、と言われました。ターゲットの子ども達は四歳児ですので、四歳の子どものがこういうことをやっているということになります。

ある35歳のアメリカ人の先生は、こんなことを散々言われたら泣いちゃうとおっしゃっていました。しかし、他の先生は、小さい頃からそういうことをやっていたら大丈夫なのかもしれない、ということをおっしゃっています。

質問者（女性4）：ビデオはツールだということですが、いろいろな活動をするかどうか、という次元で文化を見るのですか。例えば私が先ほどのトークを見ていると、ビデオは話し手を映しているのですが、多分日本の保育者や教師は、どのように聞き手が聞きながらそこで集団が出来あがっているのかを見ると思います。つまり活動しているかどうか、批判をしているかどうかではなくて、批判の議論の質がどうか、というところを文化として論じるのではないかと思います。その辺りはどうでしょうか。難しい？ 聞いちゃいけなかった？

トービン： Yes, firstly we have a member in the team from each country, so we try to control that way. And number two, we show the teachers a lot, several hours of the videos and we say to them, “What should be

included, what is most important to you?” So we select fifteen different scenes of routines; arrival, lunch, play, that’s one criterion. Then, we select scenes that the school considers very important to them. Three, we select scenes which we think are themes or issues that we want to have clarified. If I was an anthropologist and I witness something interesting I would go back and say, “Tell me about that.” It is a hybrid of three kinds of contents.

Well, again, one is routine activities. Two is something that the school feels it’s most important to them or they are most proud of. And three is what we call provocative issues that we are confused or surprised which need their explanation. But when we ask them, they say it’s obvious. Sometimes the things we think are interesting they think it’s boring, and the things they think are interesting, we think it’s boring. It’s a combination.

門田： どういった視点でビデオを撮影するかという点で三つの要素があります。一つ目には何がそこに含まれるべきなのかという点。二つ目には、その文化のプリスクールの中でその皆さんが大事だと思っていractionすること。三つ目には、私たち自身撮る側として分からないこと、聞いてみたいことです。これらをビデオを作成する際のポイントにしていたということです。恒吉先生コメント、補足をお願いします。

恒吉：今の点は私たちがビデオを作る時にも話題になりました。You said that you use routines, what the school feels important and provocative issues. Are you not assuming certain aspects, especially regarding the provocative issue? Because when you choose a certain scene that you want to show in China to others, it would seem that there would be a latent assumption that that is the issue, or at least that that must be one of the issues. And then, is it not likely that you would be drawing out answers, which would be confirming that assumption?

トービン： I agree. The tape is not an objective or naturally occurring event, it is highly constructed. But when you are asking interview questions, where do the questions come from? They reflect some interest, your research question, your knowledge of the previous literatures, things you want to understand. So if you have ten questions you ask in a survey or an interview, we could say those reflect your bias. Yes

they do. I don't think it is true that we already accept certain answers, rather, we genuinely wonder and sometimes we do have an idea but it's often wrong. In the tradition of anthropology you go and live with people, you see things, and you try to understand them, but you want the insider's explanation of their behaviors. Very often, the things you ask them to explain, they don't think they need to explain it. So it does have an assumption of an audience who would find this interesting or mysterious.

恒吉： So obviously, for the provocative issues, you are trying to chose things from an insider's view. But when you take it to the other countries it would probably...

トービン： Right, it is to answer questions that outsiders will have about the culture.

恒吉： Which explains more about that culture.

トービン： Yes. For instance, in Japan I am always asking, "Why do you have thirty children to one teacher?" The Japanese first response is "that's what we have" or "that's just how we do it." So to them, there is nothing to explain. It is a dialogue between insiders and outsiders that co-construct a story, but it is not objective it's the context of the particular country. In China they have ideas about Japan and the Unites States, and we acknowledge that. These three countries, in this particular period, and our particular interest lead to the video and to the discussion.

恒吉： What was the most surprising point that came out in China?

トービン： Well, I was very surprised to see the critical activity. It never occurred to me that a four-year-old could give and take criticism. I hope we can convince the people in the United States that this should change the whole curriculum of self-esteem; I think this is a very radical challenge to assumptions about what children can and should do. So that is one dramatic example. For me, that was interesting. The second major thing is that how much China has changed in just one generation. That has amazed me. As for the third, I will show you one more scene from the video.

門田：アウトサイダーの視点からひとつの文化を撮っていく時に、発見したいもの、刺激を受けたいものをそこ

に入りたいということです。アウトサイダーの人間がつくった視点をそこに入れて、自国の人にそのビデオを見せたときに反応がありますし、それを持って行って外の人にそれを見せたときの反応というものがあります。ですから、皆さんが通常インタビューをする時に、必ず自分が今既に知っていること、知りたいこと、聞きたいこと、そういうことを引きずってインタビューをするのと同様、自分たちの知りたいことや視点をビデオのコンテンツの中に入れていきます。文化の中と外の人間の意見をより刺激的に発生させ、聞いていくという手法を考えて、三つ目の私たちが聞きたい、知りたいという視点を喚起するところを入れたということです。

食事の後に子ども達が自分たちで部屋のアレンジを変えて、社会的な遊びというか、お店屋さんごっこのもう少し大きいな遊びのようなものをやり始めました。これは美容院だったりします。この遊びは子ども達がやり始め、しかも毎日のように子ども達はいろいろなものを家から持ってきては、遊びを膨らませていくということをや、六ヶ月後にはすごく面白い、かなり現実的なところに近いやりとりを子ども達が創り出した遊びです。

最初の時のビデオにあったような先生がブロックをやりなさいと指示した遊びとは全く違い、子どもたち自身が自発的に作り出していく遊びを、この上海の幼稚園ではするようになりました。それは中国が非常に変化したところです。

<ビデオを観ながら>

それぞれの小物を家からたくさん持ってきて、先生も一緒に遊んでいます。おばあさんの役割の人もいていろいろな所に入出入りしています。これはお医者さんで体温や血圧がどうかを書いています。これは病気なので手術をしています。お腹を切って虫が沢山入っていたから悪かったのだと説明しています。どれくらい入っていたかという問いに、百個くらいと答えています。これはマクドナルドと書いてあります。お金を持っている、持っていないということを含めた、お金という概念もあり、先生が「今日私お金持っていないけれど、どうしたらいいかしら」ということをしています。

お金のやりとりができるようになったところで、先生がひとつ上の質問をすることにより、今度はお金を持っていないという時にどうしたらいいかなど、子ども達の新たな反応を引き出しています。したがって先生たちも遊びに参加しながら子どもの力を引き出しています。

子ども達が主体的にする遊びですが、先生たちは一緒に遊びながら次に自分たちは何ができるかを考えて質問をしていく、ということの後インタビューでおっしゃ

っていました。問題が起こって先生に相談に行っています。どちらかの子が櫛を取ってしまいました。やってきたおまわりさんに、この子が櫛を取ってしまったので仕事ができない、と訴えています。そこでおまわりさんが解決にあたっています。最終的には櫛を返し、先生の力無しで解決しました。

そして、今日どういうことがあったのかを反省会で復習をします。ここで何があったのかを訊ねると、櫛をとぐということをさせなかったことを訴えます。どうしてかを話し合い、どういう風に問題を解決したかを話します。

一年後に中国に戻り、このビデオ見せたところ、子ども達との反省会の善悪をめぐり先生たちの意見が分かれました。この活動そのものだけで子ども達は遊んでいるのでそれで十分ではないか、とする意見と、子ども達のことを引き出すような質問をしながら先生がもう一度確認していくということが大事だ、とする意見のディスカッションがこのビデオを観ながら起こりました。先生たちは非常に意欲的で、上海に限らず、児童中心主義という中国の幼児教育にとっては新しい考え方に関して、どうしたら上手くいくのかということをや日々模索、工夫していらっしゃいました。

トービン： Let me present to you just a couple of quick conclusions. First, when we showed the teachers the old tape, all the teachers from twenty years ago were still there and nobody was embarrassed. They said, "That looks good, during that time what we did was the best we could do in that situation, and that was a different time. Our country was a different country." That was an interesting reaction. The transition, they said, was from a teacher-centered to children-centered activities. The teachers must change their role dramatically which was a difficult task but they told us that they were trying.

When we showed that Shanghai tape in Kunming and asked, "What do you think?" They said, "That's very Shanghai." Some said, "We are on the same road but they are ahead of us." But others said, "No we have the same general idea but theirs' are the Shanghai interpretation and we have our own interpretation. They are too far." But everybody recognized the same general direction. There was no disagreement about the direction, but there was disagreement about the localization, style and speed. In China everyone shares a general philosophy that comes from

the government, but they have different ideas about it. Some places are ahead of the other. My colleague Yeh Hsueh, a psychologist, said that we could think of this like a kind of decollage; they are changing but they are still in the middle of the transition. Maybe we are lucky to be catching a big change just as it is happening. We see a hybrid of Chinese traditions and new ideas. Professor Zhu once said, "When we learn good things from others we should not swallow without digesting. Chinese culture has a long history and many merits. We have learned a lot from the West. (In recent years for instance, we are learning) from the Reggio (approach in Italy.) But we have many good things in our own culture, too. Our pre-school (education) reflects Chinese culture not just outside. The West should be learning from us, not just us." I think China has a lot to teach the United States, maybe Japan also, right now. It is an amazing story how quickly they have moved.

門田：今のところを簡単に。二十年前の古いビデオをもう一度先生たちに観ていただいたときに、あの時はあの時で私たちにできる最善のことをしたのだから、あれはあれで良かったのだ、というリアクションが返ってきました。非常に好意的な視点で古いビデオを観ていただきました。古いビデオを持って返って観ていただいた私たちとしても良かったなと思いました。また、二十年の間に起きた最も大きな変化は児童中心主義的な活動内容に変わっていているという点です。更に、それに伴う先生の役割の変化も特筆すべき点でした。

また、今どういう形で中国の幼児教育が動いているのかという視点でみた場合、先ほど観ていただいたストーリーテリングは相変わらずあるのだけれども、スタイルや内容に違う点が見られました。また、今観ていただいたような役割分担の遊び方、それも子ども主体型の遊びが出てきています。そういったことを取り合わせて見てみますと、中国の幼児教育においてキーとなる点は、ひとつにはアンバランスな近代化があります。つまりコンミングにおいて上海の幼稚園のビデオを観ていただいたとき「これは分かるけれども、非常に上海的ね」という反応が返ってきました。根底に流れていることを理解し合うということはあると思いますが、同じ中国とはいえ少し不均衡なところがあり、そういう解釈の仕方が入ってきているということがあります。また、今日はいらっしゃいませんが共同研究者であり中国人であるイエ先生が中国はまだトランジション、つまり動いている真只中である



ということを指摘されました。これからどっちの方向に行くのかという方向性については皆さん確実に同じ方向に向いていらっしゃるようですが、まだ動いている途中であるということが改めて分かりました。その動きの中に、ハイブリッドという言葉をお使いになっておられましたが、中国の伝統と西洋の新しい部分が混在しているということ、もう少し詳しくみていかなければなりません。

そして、上海の幼稚園を紹介してくださった朱先生の言葉を引用されています。美味しいものを食べるときに私たちは嘔まずにいきなり飲みこんだりはせずにちゃんと租借をし、味わって良いものを取り入れようとするのと同じで、中国の文化にも長い歴史があり、非常にいいことがある。例えばイタリアのレージョ・エミリアの実践から学びながらも、自国の文化の大事な点を大切にしていかなければならない。ですから、西洋の皆さんも私たち中国の実践から何か学びなさい、という引用で締めくくっていらっしゃいます。

なぜ中国がこうも劇的に変わったのかを中国の先生に聞いたところ、私たち中国という国は経済状態を変えていきたいと思っている。市場原理が動いている国際競争のなかで勝ち抜いていきたいのだ。国際競争のなかで勝ち抜いていくためには新しい人民を創って行かなければならない。新しい中国人民をつくっていくためには新しい幼児教育が必要なのだ、という返事が返ってきました。最終的に幼児教育まで辿りついた点にトービン先生は驚かれておられます。特に、ほとんどの現場の先生の口から同じこと場が明確に発せられたことに驚きを持たれたということです。

#### <休息>

秋田：それでは始めさせていただきます。今からトービン先生に日本のビデオをみせていただきます。プレゼンテーション終了後、波多野先生と恒吉先生にコメントをいただきます。

トービン：I will now show you one example from Japan. You saw a different country, China, now let's look at your own country.

#### <ビデオ>

トービン：In 1985 we filmed the Komatsudani hoikuen, a Buddhist temple pre-school in Kyoto. Here is a scene taking place in the morning when the children arrive, before the formal part of the day, some of the older girls go to the nursery and they take a baby

to play in the playground.

唐澤：古いビデオの方です。年長さんの子どもがまだ歩けない子どもを遊び場に連れて行くシーンです。

唐澤：先程のシーンは小さい子どもを大きい子どもが助けてあげていました。その幼稚園の園長先生にこのシーンの説明を求めると、子ども達が他の子どもへの思いやりを育てるという点で非常に大事である、特に少子化が進み、兄弟の数が少なくなっているなかそういう機会がない子どもたちに異年齢グループで遊ぶということが大事である、という答えが返ってきました。こういう活動を実際には行っていない幼稚園が多かったのですが、この園長先生の説明に関して皆さんそれを良いこととして認めていらっしゃいました。その形が20年経つと違った形になっています。

十年前の吉沢先生の説明では、最近の日本では子ども達の世界は狭くなった。だから保育園は必要です。二十年前の子ども達の自発的な動きを見ましたが、今回はご飯の後、五歳の子どもが1、2才児のクラスに行き、おやつを食べるお手伝いをするということをするようになっていきます。これは一人の子がトイレでどうやって用を足すのかを教えているところです。これはご飯を食べさせていますが、上手いかなかったりしています。

唐澤：中国のビデオでは変化を見ましたが、日本の事例を連続性の例として挙げています。思いやり、小さい子どもを大きな子どもが面倒をみるということは二十年前は自発的にやっていたことを、当番という形でルーチン化しています。そこで流れている考え方は、小松谷保育園においては20年前と同じであります。少子化が更に進んでいる今日、その重要性の認識は同じであるということです。

唐澤：先ほどのコメントにも関わってくるのだと思いますが、変化があったときにそれをどう捉えるのか、特に文化比較をするときに、こちらの文化の方がよくて、あちらは良くないというような態度は基本的にとりません。同様に、歴史的なパースペクティブをとったときに、昔やっていたことは非常にプリミティブで何も出来なかったというふうに捉えていいのでしょうか。先ほどの中国の先生方の、自分たちはベストを尽くしてきたというコメントは非常に印象的です。歴史的パースペクティブをとるときにそれぞれの文化、社会が変化していくなかで、それぞれの違いがあるのだということをどう説明していくのかということが私たちに残された課題だと思っています。

同じようなことの繰り返しになりますが、どうやって

違い、変化というものがあつたのかを計っていけばいいのでしょうか。文化に合っているか否かを考えるのか、中国の様に新しい経済体制に子どもを合わせていくための変化とみるのか、それとも早期教育において子どもが早く発達する様を見て、やっている方法がいいと考えるのか。これらについて答えは出ていません。私たちもコンティニューイティーとチェンジということを研究テーマに置いたのですが、どのようにあがってきたデータ、先生たちのプロトコールというものを解釈していったらいいのか、そこが私たちの問題でもありますので、先生方のご意見も伺いたいです。

変化という意味では変わったという面も多く、それは社会的な変化によってなされています。中国の場合のように物質的には豊かになっていますが、伝統的な文化は変化しているところが沢山あるかもしれません。しかし、より深いレベルでは変わらない部分もあり、子ども達に対する考え方については日本、中国、アメリカにおいて、かなり根強いもの、簡単には変わらないものがあるのではないかと、というのが私たちのひとつの結論です。そのなかで子どもに対する考え方という側面、社会的制度へのフレキシブルな対応の必要があるという側面が統合された場所が幼児教育という場であると、現在のところ子どもは考えているということでもまとめさせていただきたいと思います。

#### <休憩>

波多野（英語であつたので門田が通訳）：重要な点を四つ挙げさせていただきたいと思います。一つ目は、ビデオはツールでありデータではないというトービン先生の意見に対して、私は真っ向から反対であると考えます。ビデオを作成した時点ではビデオを質問項目と同等と捉えることができるかもしれませんが、それを人々にみせ、多くの人がそれに賛成したり、これは確かにもっともだ、と言った段階でそのビデオはその文化を代表するものになってしまうのです。

二つ目の点は、この研究が歴史的、縦断的な研究であるという点に私は非常に感銘を受け、敬意を表します。ヴィゴツキーも歴史的な視点で物事をみることを推奨していますが、殆どそういった研究がなされているのを見

たことはありませんが、二つだけ認識しています。ひとつは25年ほど前のパトリシア・グリーンフィールドによる母娘間の紡ぎに関する文化人類学の研究です。経済、文化の違いが実践に影響を与えるということは今も昔も変わりはないのかもしれません。クリエイティビティが主となってくるという点もある意味ユニバーサル、どこでも見られるのかもしれません。しかし歴史を20年という長い単位で見えていくという点、そこにおける文化的な違いを研究されている点に敬意を表します。

三つ目は歴史相対主義についてです。確かに20年前と比較して私たちの生活はより良くなっているだろうと考えます。小田先生、秋田先生、恒吉先生を始め日本の教育学者方ががんばってこられた結果、二十年前よりは今の教育はきっと良いであろうと考えます。もしかしたらそうでないかもしれませんが、リニア、一直線上で質が向上し、発展していくという考え方ではなく、様々な側面を含めて見ていく必要があります。それは文化相対主義に対する否定、歴史相対主義的な見方を入れていく必要があるということです。また、定性的な立場ではなく、もう一方の視点として、人と人とを比べるということに対して常に批判的な立場をとっています。人と人は比べられないのではないのでしょうか。歴史的な経緯では確かに、昔と今を比較してどれくらい進歩したかについて語ることができるかもしれません。しかし、今同じ現在にある、リニアな、一直線の状況にあることここがどう違うのかを、そして人を比較することには限界があるのではないのでしょうか。

四つ目は、比較文化研究に対して私は常に批判的な立場をとります。なぜならば比較文化を行う際に必ず相違に重点がおかれ、相似点に関しては言及されることが少ないからです。幼児教育において、その性質からいって制度、施設、環境などきつと世界中どの幼児教育をみても共通する点があるのではないのでしょうか。こういう視点でも研究がなされるべきです。比較文化研究をする際に、違いと同時に似ている部分をバランスを取りながら研究し、特筆すべき部分にのみ関心を向けるのではなく、普遍的な部分にも着目しながら研究を進めていければいいのではないかと思います。

以上